中井履軒『論語逢原』におけるコンテクスト理解の特質

佐藤秀俊

はじめに

中井履軒（一七三二～一八一七）は江戸時代中期に活躍した、懐徳堂学派の儒者である。履軒は自身の経学研究を整理し、『七経逢原』を編纂した。『論語』に注釈を施した『論語逢原』はその一部である。

本稿では『論語逢原』におけるコンテクスト判断に、発言者に応じた判断基準の差異が見出されるのではないかという提起を行う。

なお『論語』本文及び『論語逢原』の引用は、中井履軒『論語雕題　懐徳堂文庫本』（一九九六、吉川弘文館）に拠っている。

一　主要な先行研究と本稿の課題

履軒の『論語』に対するコンテクスト理解の態度は、『論語逢原』（以下『逢原』と称する）季氏篇・第九章における次の記述に端的に示される。

言各有当。章各有旨。雖論語中、不得援来合掌作解。況中庸更出於別手。豈可著合掌解哉。凡程張以下諸子、皆喜玩味其理、而不玩味本章語気文勢。故可憾者者多矣。蓋其平日不愛文章故耳。

（言各々当たる有り。章各々旨有り。『論語』中と雖も、援来合掌して解を作すを得ず。況んや『中庸』は更に別手に出づるをや。豈に合掌して解を著すべけんや。凡そ程・張以下諸子、皆其の理を玩味するを喜び、而して本章の語気文勢を玩味せず。故に憾むべきもの多し。蓋し其の平日に文章を愛さざるの故なるのみ。）

『論語』中の各章の意味するところは「語気文勢」を抜きにしては理解できない。『論語』一書の中でさえそうなのだから、他書の用例を持ち込むことはなおさら、『論

語』の本義を損ねることとなる。朱子学派に遍くみえるこうした傾向が、解釈を物足りないものにしている。このように履軒は、『集注』が『論語』解釈の根拠として『中庸』の記述を用いることを批判する。

陽貨篇ではまた「但だ語脈に尋ねて読むべきのみ」[1]ともいうように、朱子があらかじめ経書全体を束ねる世界観や人間観を想定したのに対して、履軒はたとえ断片的な言葉であっても個々のコンテクスト（語気文勢・語脈）の解明が先決であることを主張した。

こうした記述を受け、既に多くの先行研究が履軒のコンテクスト理解について言及している。たとえば、加地伸行は「『論語』に対して、朱子のような無理な注釈を加えず、率直にして自然な理解をしようとする」[2]ことを『逢原』の特色として挙げた。また『逢原』におけるコンテクスト理解の基準について、久米裕子は「履軒個人の言語感覚や実体験によって形成された常識的判断に基づ」[3]くものとし、また宇野田尚哉は「その自明性において見出されたところの人倫的徳行」[4]とする。それぞれの論考には首肯すべき点が多く含まれており、また、それらは『逢原』のコンテクスト理解の態度に関して相互に対立するものではない。このことからコンテクスト理解の基準は、その全容を一元的に説明できるものでないことが窺われる。

本稿もまたこれらの先行研究と対立するものではなく、履軒の用いたコンテクスト理解に新たな側面を見出そうとするものである。具体的には、『論語』に記録されたテクストについて、省略と過多に言及する記述に着目する。『逢原』では『論語』中の全ての字句に等しく信頼が置かれるわけではなく、しばしば字句に応じた信頼の軽重が見出される。それが顕著に示されるのが、テクストの省略及び過多への視点であり、またこの視点は基本的に『集注』批判と結びついている。以下ではそうした批判の様相を検討し、『論語』中の字句に見出す信頼や価値の軽重が、『論語』中の言辞が記録された過程に対する履軒の態度の影響を受けていることを示す。

二　テクストの省略への視点

朱子学の特徴の一つに、道統の説の尊重がある。道統の説は、早くは唐代の韓愈（七六八～八二四）によって提唱されたもので、儒家における「先王の教」を継承する伝統を指す。韓愈の著書『原道』の記述に拠れば、先王の道は堯に始まって聖人の間に伝えられ、孔子、さらに孟子へと至ったが、孟子の死を以て断絶したという。朱

子はこの説に基づきながら、一度途絶えた先王の道がおよそ千年の時をおいて周濂渓によって取り戻されたとし、自身もまたその後に続くものと位置付けている。[5]

先王の道は伝統とされることが重要なのであり、そのため朱子は経典解釈において、聖人の教えを継承する弟子の存在に重きをおく。『礼記』の一篇であった『大学』『中庸』を独立させ、『論語』『孟子』とまとめて「四書」としたのは朱子に始まるが、ここには孔子、曾子、子思、孟子と連なる学統を重視せんとする姿勢を窺うことができる。

先王の道の継承を『論語』に見出すためには、聖人の教えが弟子に理解されていることを示さねばならない。それゆえ『集注』では、『論語』中の問辞もまた経書を一貫する思想に合致することが求められ、その一字一句までもが緻密に解釈された。つまり『論語』中の弟子の言辞は、孔子の回答を導く契機としての役割に加え、特に『集注』においては道統の継承を証明する役割を示す上でも重要な資料として扱われたのである。

こうした『集注』の態度に対して、履軒は弟子の言辞の一字一句を逼く検討することを、例えば次のように批判する。履軒の記述に対応する『論語』本文(衛霊公篇・第九章)を併せて引用する。

【論語】顔淵問為邦。子曰、行夏之時、乗殷之輅、服周之冕、楽則韶舞、放鄭声、遠佞人。鄭声淫、佞人殆。

(顔淵邦を為(おさ)むるを問う。子曰わく、夏の時を行い、殷の輅(ろ)に乗り、周の冕(べん)を服し、楽は則ち韶舞し、鄭声(ていせい)を放ち、佞人を遠ざけよ。鄭声は淫にして、佞人は殆(あやう)し、と。)

【逢原】顔氏問辞。蓋有云云也。記者唯以為邦両字括之。以答辞足明之故耳。凡論語中問辞。類如此。勿横生葛藤。

(顔氏の問辞、蓋し云云有るなり。記者唯だ邦を為むるの両字を以て之を括る。答辞之を明らかにするに足るを以ての故なり。凡そ論語中の問辞、類(おおよ)そ此の如し。横に葛藤を生ずる勿かれ。)

顔淵の「為邦」という問いに対し、孔子は暦・乗物・音楽等について具体的に回答する。履軒はこの対話を、本来顔淵は詳細を問うていたのだが、記録者はその要点として「為邦」のみを記したのだと捉える。なぜなら孔子の回答は、顔淵が問うた内容を明らかにするのに十分

であったためである（「以答辞足明之故耳」）。『論語』中の問辞はおおよそこうしたものである、と履軒は言う。ここに、『論語』中の特に問辞（問いかけのことば）に関して、履軒が記録上の省略を見出した様子が窺われる。

また「類如此」と述べているように、履軒が『論語』中の問辞に関して記録上の省略を見出すのは右の箇所のみではない。たとえば、同じく衛霊公篇・第八章に同様の観点が示される。

【論語】子貢問為仁。子曰、工欲善其事、必先利其器。居是邦也、事其大夫之賢者、友其士之仁者。

（子貢仁を為るを問う。子曰わく、工其の事を善くせんと欲すれば、必ず先ず其の器を利くす。是の邦に居るや、其大夫の賢者に事え、其の士の仁者を友とす。）

「為仁」とはどういうことかという子貢の問いに、孔子が回答する場面である。この箇所の『集注』は次のように言う。

【集注】賢、以事言、仁、以徳言。夫子嘗謂、子貢悦不若己者。故以是告之。欲其有所厳憚切磋以成其徳也。程子曰、子貢問為仁、非問仁也。故孔子告之以為仁之資而已。

（賢は事を以て言い、仁は徳を以て言う。夫子嘗て謂う、子貢己に若かざる者を悦ぶ、と。故に是を以て之に告ぐ。其の厳憚切磋する所有りて以て其の徳を成さんと欲するなり。程子曰わく、子貢仁を為すを問いて、仁を問うに非ず。故に孔子之に告ぐるに仁を為すの資を以てするのみ、と。）

ここで程注は、本章における問辞が「問仁」でなく「問為仁」であることへの注目を促す。さらに「故に孔子之に告ぐるに仁を為すの資を以てするのみ」と、問辞に従って孔子の回答を解釈することを試みている。これに対して、同箇所の『逢原』では次のように言う。

【逢原】問為仁、与問仁無殊義。程説不當采入。悦不若己者。出于家語。難据。此不富援作説。厳憚是也不可従。士位卑。其賢行難観。故惟称其仁。仁字意軽。順善即是。

（仁を為るを問うは、仁を問うと殊なる義無し。程説當に采入すべからず。

己に若かざる者を悦ぶは、家語より出ず。据うること難し。此れ援に富まずして説を作す。厳憚も是れなり、従うべからず。
士位卑しければ、其の賢行観難し。故に惟だ其の仁を称す。仁字の意軽し。順善即ち是れなり。）

「仁を為るを問うは、仁を問うと殊なる義無し」の語から、「為」字に着目した解釈を試みる程注を履軒が明確に批判していることが分かる。ただし「悦不若己者」以下の記述は、孔子のいう「仁者」の意味するところを求めるもので、「為仁」に言及するものではない。換言すれば、『集注』が着目するところの質問者（子貢）の意図について、これに着目しないことの論拠は示されていない。つまり、履軒は『集注』が「問仁」と「問為仁」とが同義でないと解釈することに正対した批判をしないままに、「問仁」すなわち「問為仁」であることを主張するのである。こうした論拠を欠く主張の背景に、『論語』を聖典として一字一句に深意を見出そうとする『集注』と、「天地間第一の文章」と崇める『論語』といえどもコンテクストの内部において各字句の間に価値の軽重を認め、『集注』の行き過ぎた解釈を改めんとする『逢原』との立場の差異が窺われる。

以上の二例に加えて、『逢原』では雍也篇・第一章への注では「首節既題南面。故記者以問一字総其意（首節に既に南面と題す。故に記者問の一字を以て其の意を総ぶるのみ）」とも述べている。このように履軒は、『論語』中の問辞に関する記録上の省略に繰り返し言及している。

三　テクストの過多への視点

テクストの省略への視点が示される一方、『逢原』には、『論語』のテクストについて文意を伝達する上で過多というべき字句もまた見出した様子が窺われる。たとえば次に示す学而篇・十二章への注解である。

【論語】有子曰、礼之用、和為貴。先王之道、斯為美。小大由之。有所不行。知和而和、不以礼節之、亦不可行也。
（有子曰わく、礼の用、和を貴しと為す。先王の道、斯れを美と為す。小大之に由る。行われざる所有り。和を知りて和するも、礼を以て之を節せざれば、亦た行わる可からざるなり、と。）

【集注】承上文而言。如此而復有所不行者、以其徒

知和之為貴、而一於和、不復以礼節之、則亦非復理之本然矣。所以流蕩忘反、而亦不可行也。
（上文を承けて言う。此くの如くにして復た行われざる所有るは、其の徒らに和の貴きを為すを知り、和に一にするのみにして、復た礼を以て之を節せざれば、則ち亦た礼の本然に復するに非ず。流蕩して反るを忘れ、亦た行わるべからざる所以なり。）

【逢原】和、謂従容円滑。彼此順便也。注亦此之意。而語未備。自然之理、此不必言。用者、謂方施行之手段光景也。礼与用、難体用剖之。小大、謂小礼大礼。之字指和。如上文礼而和。何有不行。此云不行者。蓋姑為忘上文礼字者而言也。有子之言。類如斯迂滞。
（和は、従容の円滑なるを謂う。彼此順便なり。注は亦た此の意。而れども語未だ備わらず。自然の理、此れ必ずしも言わず。用は、方に施行の手段光景を謂うなり。礼と用と、体用もて之を剖くは難し。小大は、小礼大礼を謂う。之字は和を指す。上文の「礼而和」の如きは、何ぞ行われざること有らん。此に行われずと云うは、蓋し姑く上文の礼字を忘るる者の為に言うなり。有子の言、類そ斯くの如く迂滞なり。）

「不以礼節之」について、朱注はこれを「不復以礼節之」と解し、礼の本然に関する議論へと展開する。対して履軒は、そうした議論は上文（「礼之用…」）の文意に沿わないものとして、下文における「礼」は上文における「礼」を再び述べたに過ぎないと批判する。

着目すべきは、ここで履軒が有若の言に「迂滞」な癖を見出す点である。ここでいう「迂滞」とは「まどろっこしい」といった意味合いであるが、つまり履軒は、有若の「まどろっこしさ」が朱注の誤りを導いていると指摘する。この指摘は、有若の癖を十分に注解へと反映していない『集注』への批判である。ただしその一方で、「迂滞」という表現そのものに、テクスト及び発言者たる有若個人への批判を見ることも可能であろう。この後者の批判の在り方に、履軒のコンテクスト理解の特徴が表れている。

前節で検討した履軒のコンテクスト観とは、特に問辞について『論語』のテクストに省略された形跡を見出し、文脈に応じて適切な背景を想定せねばならないことを主張するものであった。一方で右の記述には、履軒が『論語』のテクストについて、文意を伝達する上で過多とい

うべき字句もまた見出した様子が窺われる。

このことは、『論語』の記録及び編纂過程に対して、履軒がこれを厳密な規則に従ってなされたものと捉えていないことを示していよう。省略とはあくまでも便宜上の省略であり、それが為されることもあれば、為されないこともあった。有若の言における「礼」は「蓋し姑く上文の礼字を忘るる者の為に言う」もの、すなわち記録・編纂の過程において省略されうる字句であったが、ここでは残されている。履軒は、そうした省略の不徹底として遺された字句を過多と見做し、これを「迂滞」と表現したのである。

テクストの記録に関する履軒の態度をより明確に示すことを目的として、「迂滞」という表現が用いられる他の箇所を取り上げておきたい。『論語』学而篇・第二章について、『集注』の同箇所を併せて引用する。

【論語】有子曰、其為人也孝弟。而好犯上者、鮮矣。不好犯上、而好作乱者。未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者、其為仁之本与。

（有子曰わく、其の人と為りや孝弟。而して上を犯すを好む者は、鮮し。上を犯すを好まず。而して乱を作すを好む者は、未だ之れ有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁を為るの本か。）[6]

【集注】仁者、愛之理、心之徳也。為仁、猶曰行仁。（中略）言君子凡事専用力於根本、根本既立、則其道自生。若上文所謂孝弟、乃是為仁之本、学者務此、則仁道自此而生也。

（仁は、愛の理、心の徳なり。仁を為すは、猶お仁を行うと曰うがごとし。（中略）言うこころは、君子は凡事に専ら力を根本に用い、根本既に立つれば、則ち其の道自ら生ず。上文の所謂孝弟の若きは、乃ち是れ仁を為すの本、学者此に務むれば、則ち仁道此れ自り生ずるなり。）

朱子はテクストが「仁之本与」ではなく「為仁之本与」であることに着目し、『論語』において単に「仁」という場合と「為仁」という場合とに異なる意図を見出す。これは、「為」字に特別の意味を持たせない朱子学以前の解釈とは異なる観点である。対して履軒は次のように言う。

【逢原】或曰、為衍文。当削。此言誠有理。然有子之語、毎弛慢迂滞。蓋其癖云。陸象山詬為支離。亦

不多失。故此不必衍。読者不拘於為之有無、可也。
（或ひと曰く、「為」は衍文なり。当に削るべしと。此の言誠に理有り。然れども有子の語、毎に弛慢迂滞たり。蓋し其れ癖ならんと云う。陸象山詬めて「支離」と為すも、亦た多失ならず。故に此れ必ずしも衍ならず。読者「為」の有無に拘らずして、可なり。）

この章については、「其仁之本与」となっているテクストと「其為仁之本与」となっているテクストとの二つがある。さらに後者の読み方については、「其れ仁の本為るか」という読み方と「其れ仁を為うの本か」という読み方の二通りに大きく分かれる。

その中で、履軒は「其仁之本与」の立場を取るものを「或ひと」として取り上げる。そして「為」を衍文、すなわち誤って書き入れられた字句と捉えることを基本的に肯定している。「基本的」というのは、履軒は「為」が衍文である可能性について是とするのみであって、これを断定していないためである。既に述べたように、履軒は有若の言葉に「弛慢迂滞」な癖を見出している。それゆえ履軒には、「為」が衍文であるか、もしくは発言上の癖の影響であるかを判断することができないのである。そうした背景が、履軒の「読者不拘於為之有無、可也」という主張を導いている。

本来、この章のようにテクストへの疑いが生じた場合に、元の正しい在り方を求めることは自然といえるだろう。そのような姿勢は、テクストへの敬意から生まれる想いである。しかし履軒は、正しい在り方を求めることを放棄している。つまりここでは、テクストへの敬意もまた放棄されているように思われる。「為」を衍字と見なすことは、直ちにテクストへの敬意が欠けることを意味しない。それは正しいテクストを求めることによって、すなわち有若の言葉への敬意によって説が分かれることになるためである。それゆえ「読者不拘於為之有無、可也」という主張には、有若の言に対する履軒の消極的な姿勢が窺われよう。

以上のように『逢原』では、弟子の言葉を示すテクストに記録上の省略及び過多が見出されている。ただし、各字句を過多であると見做すか、また省略が見出されるかという判断には、読解者の解釈が介入している。それゆえ、『逢原』に示された解釈の妥当性については改めて検討を加える必要があろうが、それは本稿の目的とするところではない。しかし妥当性の有無に関わらず、履軒が『論語』のテクストを絶対とせず、また衍字や衍文と

いう文章伝達上の問題とは異なる視点から捉えたことによって、『論語』中の字句に見出す価値に『集注』との差異が生じていることは確かであろう。

このことに関して、履軒が記録上の省略及び過多を判断する対象が弟子の発言の記録に限定されているのは特筆すべき点である。『逢原』において、孔子の言葉に関して省略の有無に言及する記述は見えない。このことは、『逢原』におけるコンテクスト理解において、孔子の答述内容が基本的に弟子による問辞よりも優先されていることを示している。たとえば「子貢問為仁」章で、既に述べたように『集注』は問辞に従って孔子の回答を解釈することを試みている。対して『逢原』は、これを明白な根拠を示さないままに否定したように写る。しかし履軒は、履軒自身の基本的な立場に従っているために、論拠を端から必要と考えなかったのではないか。すなわち、記録上の省略及び過多が孔子の言葉に存在しないことを言外の前提とすることが、『集注』批判の根拠として置かれているのである。

以上のように『逢原』では、特に孔子か孔子でないかという発言者の差異への視点が、コンテクスト理解に影響している。さらに「孔子でない」発言者の言辞への批判的視点は、道統の説を重んじた『集注』への批判と結びつき、弟子の言辞への批判として表面化するのである。このように、『論語』のテクスト全体を聖典として扱う立場との比較において、『逢原』に一つの特徴に見出されるのである。

ただしこれまで本稿で取り上げた『逢原』の記述は、『論語』のテクスト記録上の省略及び過多に関するもののみであった。よって次には、『逢原』における弟子の言葉への全般的な態度について検討を加えたい。

四　コンテクスト理解における「弟子の語」

『論語』における弟子の言葉に対する履軒の態度は、『論語』という書名に対する立場にその一端が示されている。履軒は『逢原』巻首で次のようにいう。

芸文志曰、当時弟子各有所記。夫子既卒、門人相与輯論簒。故謂之論語。此按門人、謂弟子門人、非孔門之人。語者謂孔子之語也。雖間有弟子之語、是附記已。非題号所指。

（「芸文志」に曰わく、当時弟子各々記す所有り。夫子既に卒すれば、門人相い与に輯めて論簒す。故に之を論語と謂うと。此れ按ずるに門人とは、弟子の

門人を謂い、孔門の人に非ず。語とは孔子の語を謂うなり。間々弟子の語有りと雖も、是れ附記するのみ。題号の指す所に非ず。）

ここでは『漢書』「芸文志」が引かれ、履軒は概ねその記述に従っている。ただし「語とは孔子の語を謂うなり。間々弟子の語有りと雖も、是れ附記するのみ」として、『論語』における弟子の言葉を附記と見る態度を強調している。ここでいう「語」とは、基本的に「有子曰、其為人也孝弟」章のような弟子の言葉のみで構成された章を指すと捉えるのが穏当であろう。ただし『逢原』においては、既に見たように、孔子の答述内容が弟子による問辞よりも優先される場合がある。それゆえ、ここでいう「語」とは孔子との対話における問辞もまた含むものとも考えられる。いずれにせよ右の記述は、履軒が『論語』という書を、孔子の言葉を中心として読み取ろうとした態度の表明と見ることができよう。見方を変えれば、履軒にはこうした態度を表明する必要が求められていたとも考えられる。それは、たとえば「子貢問為仁」のように、『集注』批判における直接の根拠を欠き、弟子の言葉より孔子の言葉を優先することによってのみ成立する解釈が『逢原』に見えるためである。『論語』という書名に対する立場の表明において、こうした解釈が成立する状況を履軒は示しているのである。

また、これまで本稿で挙げた『逢原』の記述は『論語』のテクスト記録上の省略及び過多に関するものであった。その一方で、次のように発言内容そのものに誤りを指摘しているものがある。たとえば公冶長篇・第十二章の次の箇所である。

【論語】子貢曰、我不欲人之加諸我也。吾亦欲無加諸人。子曰、賜也、非爾所及也。
（子貢曰わく、我人の諸を我に加うるを欲せざるなり。吾も亦た諸を人に加うる無きを欲す。子曰わく、賜や、爾が及ぶ所に非ざるなり。）

【集注】子貢言、我所不欲人加於我之事、我亦不欲以此加之於人。此仁者之事、不待勉強。故夫子以為非子貢所及。
（子貢言う、我人の我に加えんと欲せざる所の事を、我も亦た此を以て之を人に加えんと欲せず、と。此れ仁者の事、勉強を待たず。故に夫子以為えらく子貢の及ぶ所に非ず、と。）

【逢原】子貢之病、在吾亦欲三字。此躉言耳。（中略）此章注、無一句得当。蓋弗察子貢之躉言故也。（子貢の病、「吾亦欲」の三字に在り。此れ躉言なるのみ。（中略）此の章の注、一句として当を得るは無し。蓋し子貢の躉言なるを察せざるの故なり。）

『集注』が子貢の言の意図に言及するのに対して、履軒はこれを躉言（誤ったことば）に過ぎないとし、その真意を求める朱注には一つとして正しいものはないと切り捨てる。このように履軒は、子貢の言と孔子の言とを対照する上で齟齬が見出されるならば、孔子の言葉を主として子貢の言を誤りとし、そこに真意を求める議論をすべきでないと主張するのである。

弟子の言葉を附記とみなす履軒の態度は、注解の中でこのように実践されている。換言すれば、『逢原』で実践された態度とは、『論語』解釈において孔子個人の思想を抽出・伝達することに重きを置くものであったと言えよう。無論こうした意識そのものは、『論語』の解釈において特殊なものではない。しかし『集注』では、道統の説を重視する視点から弟子の言葉に価値が置かれ、孔子個人の思想の抽出・伝達という視点は希薄なものとなっていた。この点に課題を見出し、孔子個人の思想を尊重する態度が実践された点に、『逢原』の価値の一側面を窺うことが出来るのではないか。

おわりに

本稿では『逢原』にみえるコンテクスト理解の在り方として、その発言者が孔子であるか、もしくは弟子であるかという視点が注解に反映されていることを述べた。このことは、『逢原』において特に弟子の言辞にのみ省略や過多の字句が見出されている点に示されている。また、弟子の言辞が孔子の言辞解釈に影響を与え、孔子個人の思想の抽出・伝達という意図が希薄となった『集注』への批判が、弟子の言葉を附記とみなす履軒の態度の背景にあると推察される。

ただし先述したとおり、テクスト中のある言辞が省略・過多であると判断することには、読者の解釈が介入せざるを得ない。「有子曰、其為人也孝弟」章が顕著な例であるように、遺されたテクストを尊重し、「為」の一字を解釈に反映させる『集注』と、それを許容しない『逢原』との間で、どちらにより確かな妥当性が見出されるかといった点には、さらに検討を加える必要があるだろう。

＊本稿における『論語』本文及び書き下し文、『論語逢原』本文の引用は中井履軒『論語雕題　懐徳堂文庫本』（一九九六、吉川弘文館）に拠った。また『論語集注』本文の引用は『朱子全書　第六冊』（二〇〇二、上海古籍出版社）に拠った。なお引用に際しては、本文及び書き下し文はすべて現代仮名遣いとし、漢字表記は常用字体で統一した。句読点などについては、一部改めたところがある。

1　『論語逢原』陽貨篇・第二章。原文は「但当尋語脈而読焉耳」。

2　『中国思想からみた日本思想史研究』（一九八五）第三章「中国学の総合的理解」第三節「経学」第三項「中井履軒の『論語逢原』について」第三項『論語逢原』、三二五頁。引用部を含む項は『大阪の都市文化とその産業基盤　共同研究論集　第一輯』（一九八五）が一部修正されたものである。なお、後に『日本思想史研究―中國思想展開の考究』（二〇一五）にも採録されている。

3　「中井履軒の『論語』注釈方法に関する一考察―『論語逢原』「学而篇」を中心に―」（『中国学の十字路―加地伸行古稀記念論集』二〇〇六、研文出版）、六四三頁。

4　「中井履軒『論語逢原』の位置」（『懐徳』六二号、一九九四）、六二頁。

5　本稿で取り上げた箇所の原文は次のようである。なお引用は『点註唐宋八家文読本　巻一』（一八八二）に拠っている。

曰、斯道也何道也。曰、斯吾所謂道也。非向所謂老与佛之道也。堯以是伝之舜、舜以是伝之禹、禹以是伝之湯、湯以是伝之文武周公、文武周公伝之孔子、孔子伝之孟軻。軻之死不得其伝焉。荀与揚、擇焉而不精、語焉而不詳。由周公而上、上而為君。故其事行。由周公而下、下而為臣。故其説長。

（曰わく、斯の道や何の道ぞや。曰わく、斯れ吾が所謂道なり。向の所謂老と佛との道に非ざるなり。堯は是を以て之を舜に伝え、舜は是を以て之を禹に伝え、禹は是を以て之を湯に伝え、湯は是を以て之を文・武・周公に伝え、文・武・周公は之を孔子に伝え、孔子は之を孟軻に伝う。軻の死するや其の伝を得ず。荀と揚とは、擇んで精しからず、語りて詳かならず。周公よりし

て上は、上として君たり。故に其の事行わる。周公より下は、下として臣たり。故に其の説長し。）

6

引用部の書き下しは『論語雕題　懐徳堂文庫本』（一九九六、吉川弘文館）の読法に拠ったが、これは必ずしも広く認められたものではない。通例に従うならば「有子曰わく、其の人と為りや孝弟にして、上を犯すを好む者は鮮し。上を犯すを好まずして乱を作すを好む者は、未だ之れ有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁を為すの本か」のようになるであろう。なお本章に関する履軒の主張の仔細については、拙稿「中井履軒『論語逢原』における「専言之仁」「偏言之仁」」（二〇一九、文教大学大学院『言語文化研究科紀要』第五号）を参照されたい。

（春日部工業高等学校教諭・平成三十年度文教大学大学院言語文化研究科　地域言語文化研究コース卒業）